

# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

## プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビューの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

## 「京のぶぶ漬け 越後の湯漬け」

「お近くにお越しの際はどうぞお立ち寄りください」。こんな転居通知や転勤通知をもらったからといって、額面通りに「近くまで来たから立ち寄りまして」と突然押し掛けてはなりません。「どーおいんだらうね、あのしょ（人）」と後々まで言われること間違いなしです。ホンネとタテマエをよく理解してこそ一人前。

とはいえ、「今度お立ち寄りください」とリップサービスしたら、突然予告なしにやってきて、こちらは休日の昼掃除中の小休止のため、ノーメイク・ノーCONTACT・ノースカート（作業衣着用）であわわとあわてながら表面ニコニコ・内心ヤキヤキでお茶の用意をしつぶすことはよくある話です。その上、先様は察しがよろしくないのか暇なのか、はたまた居心地がよいのか、なかなか切り上げてくれないときています。

そんなとき、かつての越後人は「わーりけど、今忙しいんです」とは直接言わず「あべこべ箒にほっかむり」をしたものでした。これは、京都を中心に全国的にもみられた一種のまじない、一般的には「逆さ箒」です。主に座敷箒を逆さに立てかけ、手ぬぐいをかぶせるだけで、あんれま、客は帰ったとさ、めでたし、めでたし！という民間伝承で、新潟では、客に気取られないようにこっそり実行する、とされています。他の地域ではこれ見よがしに箒と手ぬぐいを出して掃除にかかるふりをして、それとなく客に知らせるという地域もあるようです。

とはいえ座敷箒も手ぬぐいも、懐かしの品になった現代では、実行に移すのも困難です。また用具があるからといってばたばたしては、かえって客人の関心を引き、しかもこういう相手に限って「あべこべ箒」の習慣を知らないことが予測できるため、かくし芸か余興かと勘違いされ、場合によって

はそのまゝ酒宴へとなだれこむ危険性も出てきます。こうなると、まさしく新潟弁で「あべこべならね!」。どうにもこうにもならない困った状態です。

この窮地を救う咄嗟のひとつ・おとなの言葉が京都人の「ぶぶ漬けでもどうぞ?」。「ぶぶ漬け? うんめそうだっけごっつお（御馳走）になりますわ」となるとは、「いけずやわ」、という話は京都人のホンネとタテマエを上手に使い分けたとえ話でよく耳にします。これはなにも京都だけではなく、他人の家を訪問した際「食事でも…」といわれたら、よほど親しい間柄ならいざ知らず、普通は「もう、そんな時間、そろそろおいとまを…」と辞退するのが一般的かと思えます。

さてさて、京都がぶぶ漬けなら、新潟は湯漬けとあったところでしょうか、「湯漬けでもなじら?」と言って「湯漬け? ぜひ食べてみたいです!」と答えられたら最早これまで…! 湯漬けについての説明をするはめになり、ご飯を用意するわ、お湯を沸かすわで台所どたばたとこれまた面倒なことになりかねません。

「京のぶぶ漬け、越後の湯漬け」、真偽のほどはさておいて、つかず離れずの関係を維持するための上手なコミュニケーション術、場の空気をよみとることと他人への気遣いを大切にする先人たちの知恵ともいえましよう。と書いていてふと私思いました。湯漬けでもなんでも食べてゆっくりしていった欲しい人に限って遠慮深いか多忙で、すぐおいとましてしまうもの。なんと行って引き留めればいいんだね? としょうしがりの越後人の私は思います。あっ、これを読んでるあなた、どうぞゆっくりしていったくださいね。

